

塩野谷祐一の経済倫理学*

——卓越主義の構想を中心に——

齊 藤 尚

I は じ め に

塩野谷祐一（1932-2015）が戦後における日本の経済思想を牽引してきた思想家の1人であることは、共通の了解であると考えられる。しかしながら、先行研究において、これまで塩野谷の個々の著作に対する書評などは数多くあるものの、その全体像を明らかにする研究はなされてこなかった¹⁾。その理由の1つは、塩野谷の思想の難解さにあると考えられる。彼の研究対象は全期間を通じて多岐にわたる。また彼は自著の中で様々な思想家の理念を取り入れており、そのことは塩野谷の思想の壮大さを示すと同時に、彼独自の思想に対する理解の妨げとなったと考えられる。

たしかに塩野谷は様々な思想家の理念を援用する。しかし、彼にとってそれらは自らの理論体系を明示化する際の道具として用いられており、多くの塩野谷の著作は、彼独自の思想を明らかにすることが目的であると考えられる。また彼の研究対象は多様であるものの、その中に彼の一貫した思想を読み解くことができると考える。ただし、彼独自の思想はしばしば彼の博識の陰に隠され、不明瞭に語られることがある。

本稿は、塩野谷祐一の研究を大きく初期・中期・後期と分けたいうで、彼の経済倫理学を論理的に再構築するとともに、その特徴を明らかにすることを目的とする。結論を先取りすれば、塩野谷は正と徳と善の関連性を示す倫理体系と、それぞれの理念を実現するための3つの経済学によって成り立つ経済倫理学を構築する。3つの経済学とは、経済社会学、経済動学、経済静学である。その特徴とは、倫理体系において卓越主義の理念を示すとともに、経済社会学においてそれを現実化するための制度設計の方法が示されたことである。まず倫理体系において、塩野谷は

* 本稿は、経済学史学会第82回大会における共通論題「日本経済思想の貢献 1968→2018」の報告原稿に基づいています。有江大介氏、後藤玲子氏、佐藤方宣氏、玉手慎太郎氏、西澤保氏、橋本努氏、学会・事前研究会の出席者の方々、および2人の匿名のレフェリー並びに編集委員の方から大変有意義なコメントを賜りました。ここに記して感謝を申し上げます。ただし、残された間違いの責任は全て筆者に属します。

1) 代表的な書評としては、川本（2002）、小林（2002）、森村（2002）、有江（2009）、山脇（2010）など。

「リベラルな卓越主義」と呼ばれる、卓越主義の一類型とみなせる彼独自の理念を提示する。その独自性の1つは、それが政治哲学におけるリベラリズムの思想を取り入れつつ、厚生経済学の主要目的である共通善の追求と両立可能であるように定義されることである。そのうえで彼は、経済社会学のなかで、彼が初期と後期に理想的な社会理念とみなした「リベラルな卓越主義」の社会が、中期に示した卓越主義的な制度改革の方法によって実現されると主張する。このようにして、塩野谷は厚生経済学や政治哲学の理念を総合し、さらに自らの理論の一貫性を示すことをつうじて、「総合的社会科学」としての経済倫理学の構築を目指した。

これらのことを明らかにするために、まず、塩野谷の研究を初期・中期・後期に分類したうえで、その全期間をつうじた彼の研究目的とは、新古典派経済学の代替案となりうる新しい理論としての経済倫理学を構築することであると明らかにする(第II節)。次に、塩野谷の倫理体系を明らかにし、その中心的理念である卓越主義の構想を説明する。その中で、彼の初期及び後期における議論を追いながら、彼の構想の独自性の1つが、厚生経済学の流れを汲んだ社会善の追求という社会目的と卓越主義の整合性を示したことであることを明らかにする(第III節)。続いて、塩野谷の中期及び後期における議論から、彼の経済学を明らかにすることで、経済倫理学の体系を示す(第IV節)。最後に塩野谷の経済倫理学に対する若干の疑問点を述べる。

II 分類と目的

本節は、塩野谷の研究を大きく3つの時期に分類し、それらを貫く彼の研究目的を明らかにする。

1. 分類

塩野谷の研究は多岐に及ぶものの、以下の研究内容に従って、大まかに初期・中期・後期の3つの時期に分類できる。初期は、1970年代から1980年代にかけて、主に市場における自由競争及びそれを支える理論への批判と福祉経済の分析、そしてジョン・ロールズ(John Rawls, 1921-2002)をはじめとした再分配正義論の研究に充てられた時期である。次に中期は、主にシュンペーター(Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950)の研究によって資本主義の発展や制度改革の方法に関する研究を行った1990年代を指す。そして後期は、主に初期、中期の研究を総合し、卓越主義を中心とした総合的な理論構築を試みた2000年代以降を指す。以下、順を追ってそれぞれの時期における塩野谷の貢献を概略する。

まず、初期において、塩野谷は経済学に関する2つの著作(塩野谷1973a; 1973b)と、功利主義批判及び権利論の擁護を目的とする著作(塩野谷1984)を出版する。塩野谷(1973a)は、インフレーション対策に焦点を当てたうえでケインズの体制から福祉経済路線へのシフトチェンジを説き、塩野谷(1973b)は市場の失敗がある状況下における公共財供給や福祉政策の意義を示す。つまり、2つの著作において塩野谷はすでに福祉国家政策を提唱しており、その立場は後

期まで続くと考えられる。さらにその際、彼は経済成長と福祉国家の評価基準として、後期の卓越主義を基礎づける「人間主義」という独自の観点を示唆する。塩野谷にとって人間主義とは「人間が人間としての価値を与えられている」（塩野谷 1973b, 26）ことを経済成長の指標とするという立場である。続いて塩野谷（1984）は一部の厚生経済学がよって立つ功利主義に対して、特にヘンリー・シジウィック（Henry Sidgwick, 1838-1900）の思想を内在的に分析しながら批判を展開する。その際彼が参考にするのがロールズの功利主義批判である。その著作の結論部でも、後期に明らかにされる卓越主義の立場が示唆されている（塩野谷 1984, 452-56）。

要するに、塩野谷の初期の問題関心は福祉経済の理論構築とそれを支える社会哲学の追求であり、彼はその1つとしてロールズの正義論を考察しながら、彼独自の哲学としての卓越主義の一端を示すと考えられる。

次に、中期においては、塩野谷は主にシュンペーター研究を行い、資本主義の動的な歴史的発展に関する考察をしながら、競争に生き残るエリートによる卓越主義的な経済発展及び制度改革を提唱する（塩野谷 1995; 1998, Shionoya 1997）。これらの考察は経済動学と呼ばれ、経済の静的状態を扱うために経済静学と呼ばれる新古典派経済学と対比される。

最後に、後期においては、塩野谷は卓越主義やロマン主義などを中心とした統合的な理論構築を試みる（塩野谷 2002a; 2009a; 2009b; 2012; Shionoya 2005）。この時期において、彼は初期の正義論を維持しつつ、「リベラルな卓越主義」の理念に基づく福祉国家型の社会を提唱する。またそれに至る卓越主義的な制度改革の方法を、中期に経済動学によって示された卓越主義的な改革方法を民主主義論に応用することによって提唱する（塩野谷 2002a, chap. 5）。これらの考察は経済社会学と呼ばれる。さらに、そのような社会における望むべき個人像として、ロマン主義的な創造的な個人像を提示する（塩野谷 2012）。このように塩野谷は後期において自らの理論を総合し、そうすることをつうじて学問的な境界線を越えた「総合的社会科学」としての経済倫理学の構築を試みる²⁾。

2. 目的

第1項で述べたように、塩野谷の研究は大きく3つに分類可能であるものの、彼の研究目的と中心的理念は一貫していると解釈できる。前者は当時の主流派経済学である新古典派経済学に対する批判と、それに対する代替案となりうる理論の提示である。たとえば、初期の代表作である塩野谷（1984）において、塩野谷はその著作の目的を、新古典派経済学の哲学的基礎である功利主義に対する批判と、その代替案となりうる規範経済学を素描することであると述べる。塩野谷によれば、新古典派経済学は効用最大化行動をすると仮定された経済人（homo economicus）を

2) 「総合的社会科学」とは塩野谷がシュンペーターの理論に対して名付けた言葉である（塩野谷 1995）。だが、ここでは塩野谷もまたシュンペーターに倣い、その構築を志したと解釈する。ただし、本稿は塩野谷の理論のうち経済倫理学の構築に焦点を絞っており、その全体像、特にその方法論について触れることはできない。

主体とみなし、それゆえに功利主義を土台とする。またそれは価値自由で実証に裏付けられた理論を提示する。他方で塩野谷は、経済学とはもともと実証とは切り離された規範理論であり、実証とは異なる独自の一貫した理論体系を提示しうるのだとする。それはモラル・サイエンスとしての経済学であり、その構築が彼の著作の目的である（塩野谷 1984, iv-vi, 3-20）。そのために塩野谷はロールズの功利主義批判を援用して、功利主義がなぜ個人の個性性を重視しないかを明らかにしたうえで、規範的観点から個人の権利を擁護する。

中期の主要著作である塩野谷（1995）においても、彼は新古典派経済学に対する反主流派の 1 つとしてシュンペーターを位置づけ、一方で新古典派経済学は合理的な平均的個人を主体とした静態経済を扱うが、他方でシュンペーターは創造的個人を主体とした動的な経済発展の理論構築を目指すとして、後者の理論の分析を行う（塩野谷 1995, ii-iii）。

後期においても、塩野谷は功利主義及び新古典派経済学の対抗概念として、人間の精神及び肉体の全般の能力の実現を目指すロマン主義的な卓越主義を提唱する（塩野谷 2009a; 2012）。塩野谷によれば、ロマン主義は功利主義を哲学的基礎とし、合理的な個人を主体とする新古典派経済学が見逃す非合理性を、特に感情や想像力などをも含めた人間の精神及び肉体全般、すなわち「全幅の人間本性」を扱いうる（塩野谷 2012, 165）。

要するに、塩野谷は主流派である新古典派経済学を批判するために、ロールズ、シュンペーター、あるいはロマン主義者などの反主流派の理論を分析する。このことは塩野谷において、彼独自の新しい理論構築をすることに直結する。彼によれば、主流派の理論とはその時代を映す鏡であり、またそれ以外の理論を抑圧する力をもつ。他方で反主流派の理論は、その時代の主流派の理論の欠点を指摘し、未来に適用できる新しい理論構築の土台となりうる（塩野谷 1995, iii）。そのため、塩野谷が反主流派とみなす理論を分析することは、彼が新しい理論としての経済倫理学を構築する土台となると考えられる。

III 卓越主義の理念と制度

本節では、塩野谷の経済倫理学における倫理体系の基本理念である「正・徳・善」の関係性を示し、彼の卓越主義の構想を明らかにする。結論を先取りすれば、塩野谷はこれらの基本理念に対して、既存の理論と彼独自の構想の双方に基づく定義づけを行うと解釈できる³⁾。既存の理論による定義とは、それぞれ、ロールズの正義、功利主義の善、そしてアリストテレス主義的な卓

3) 塩野谷の著作ではこれらの 2 つの解釈が混在しているように考えられる。小林正弥は塩野谷の理論のあいまいさを指摘し、功利主義的な「善」の概念に対しては「良」を、塩野谷が定義する共同体主義的な「善」の概念に対しては「善」を用いて区別することを提案する（小林 2002, 66）。ただし塩野谷は小林の指摘に対して、自分は功利主義と共同体主義の善という 2 つの善の概念の対象に行為と存在という差異を設けていると反論する（塩野谷 2002b, 70）。本稿では塩野谷による対象の分類までは扱わない。

越主義の徳の定義である（塩野谷 2002a, 24）⁴⁾。そのように定義したうえで、塩野谷は後期において、「正>徳>善」というヒエラルヒーを基本的な構造として倫理体系を構築しようと試みる（塩野谷 2009a; 2009b, 36）。この基本構造は、正>善、徳>善、正>徳という3つの要素に分離できる。他方で、これらの基本理念を塩野谷の独自の卓越主義の構想を用いて再定義した場合、それらのあいだには、正が最高の倫理であり、徳と善が一致し、徳は正の前提となるという関係性が成り立つ。以下において、それぞれの要素を順を追って説明する。

1. 正 と 善

塩野谷は初期から後期にかけて、ロールズの『正義論』（Rawls 1971）によって最初に提唱された「善に対する正の優先性」という立場に賛同し、塩野谷の表記によれば「正>善」という基本構造を提示する。

（1）『価値理念の構造』（塩野谷 1984）における正と善

前述したように、『価値理念の構造』の目的の1つはモラル・サイエンスとしての規範経済学の提示である。そのための方法論として、塩野谷は功利主義にみられる実証主義に反し、それに対抗する手段としてカント（Immanuel Kant, 1724-1804）の思想に基づく実証に比した規範の優先性という立場に意義を見出す。ロールズはカントの方法論を受け継ぎつつ、道徳的人格の尊重の理念を現代的に再現した思想家と位置づけられる（塩野谷 2002a, 390）。このような問題関心から、塩野谷は『価値理念の構造』において、ロールズを用いて功利主義に対する批判を展開したと考えられる。以下、塩野谷による功利主義批判を追っていくことにする。

功利主義とは一般的に、効用主義・帰結主義・集計主義という3つの要素によって成り立つと定義される。すなわちそれは、個々人の満足度である効用を集計した値が帰結的に最大化する行動を望ましいとみなす道徳原理である。しかし、理論家が個人がどの程度満足しているかを知ることが難しい。理論家が個人効用を測定するためには、実際の個人行動を観察し、そこから個人効用を推測する必要がある。特に新古典派経済学では、個人が効用を最大化するために行動すると予測し、実際の市場行動を観察することで個人の効用関数が明らかになると考える。そのため功利主義は実証主義に基づくことができ、新古典派経済学の哲学的基礎となりうる。

このような功利主義に対して、塩野谷は次のように分析する。前述したように、功利主義は何らかの行動を道徳的に評価する際の情報的基礎として個人の効用のみを取り上げる。言い換えれば、それは個人のあらゆる精神状態を効用という1つの基準に還元できるとみなす。そうすることで効用の個人間比較が可能となり、個々人の効用が集計可能であるとみなされる。そのうえで、功利主義は社会の個々人のその時々々の効用の総計の極大化を規範とし、社会効用を社会の支配的

4) それらの操作的価値用語は「効率・正義・卓越」であり、それぞれの目的は「効用・権利・能力」である（塩野谷 2002a, 24）。

目的とみなす（塩野谷 1984, 404-06）。

これに対して、塩野谷はシジウィック（Sidgwick 1907）の功利主義論を手掛かりに功利主義の理論構造を内在的に分析する。塩野谷によれば、個々人の効用が集計可能であるという功利主義の考え方は「善の全体論」によって基礎づけられている。「善の全体論」は「数学的全体論」を善の理論に適用した理論である（塩野谷 1984, 162）。「数学的全体論」とは、個体のもつ様々な要素のうち、それがもつ数の単位としての同一性に注目する考え方である。塩野谷によれば、それは「同質的な部分がいわば『数学的あるいは数量的全体』を構成しているとき、各部分は同じものであるから、それらに対しては偏りのない、公平な配慮が払われなければならない」（*ibid.*, 156）という考え方を意味する。たとえば、その考え方を用いれば、すべての個人はその性格こそ多様であれども、同様に 1 人であり、その 1 人という単位が合わさって人口を形成するのであり、その点ですべての個人は同じものであるから、すべての個人に対して公平な配慮が支払われるべきであるということが導かれる。それは、「全体と部分との数学的關係」に基づいて公平性を定めるという点で、「公平性と合理性の概念を結合」（*ibid.*, 162）する。「善の全体論」はこのような数学的全体論を善の理論に応用し、「善はそのような数学的全体である」（*ibid.*, 156）とみなす理論を意味する。それは、「個人的善を構成する部分は異時点における一個人の善であり、普遍的善を構成する部分は異なった個々人の善」であり、「それらがそれぞれの全体の中の同質的部分であるということは、いまや実体的な問題」（*ibid.*, 163）だという考え方である。つまり、「善の全体論」においては、数学的全体論に基づいて、瞬間ごとの効用の集計によって個人の効用が分かり、また個々人の効用の集計によって社会全体の効用が明らかになる。さらに、それさえ明らかになればほかの要素は捨象しても構わないとみなされる。

塩野谷によれば、このような「善の全体論」はシジウィックの功利主義に固有なものではなく、功利主義一般を支える基本的な公理である。塩野谷は瞬間ごとの効用の集計によって個人の効用が分かるという考え方を「異なった種類の効用の通約性」と、個々人の効用の集計によって社会の効用が分かるという考え方を「異なった個人の効用の通約性」と呼び、それぞれに批判を加える（塩野谷 1984, 378）。

まず双方の考え方は、塩野谷によれば以下のような時点主義的な人格観に基づく。ロールズの批判にもあり、またデレク・パーフィット（Derek Parfit, 1942-2017）が述べる通り、功利主義は個々人の効用を集計しうると考えることで、個々人のあいだの分離性や相違性を道徳的に重要とみなさない。その理由は功利主義の人格観に起因する。功利主義的な人格観においては、一個人の内部においてさえ異時点間の個人は異なった存在であり、それは個人のあいだにおいて個々人が異なった存在であることと等しい。したがって個人の自己同一性は存在しない（Parfit 1984）。それにもかかわらず、異時点間の個人を集計することで 1 人の個人という概念が成立する。そうであるとすれば、同様に、異なった個々人の集団も 1 人の個人とみなせるだろう。こうして、個人内でも個人間でも相互にその効用を集計することができ、数学的全体としての個人的善、あるいは普遍的善という観念が成り立つ（塩野谷 1984, 163-64）。

しかし塩野谷によれば、このような人格観は個人の道徳的人格の尊重を軽視する。塩野谷の言葉を借りれば、「功利主義は『善の全体論』を個人と社会の関係に適用することによって、『個人の相違性』を否定する。個人的善は普遍的善の中の同質的、非個人的部分として全体の中に埋没する」（塩野谷 1984, 201）。つまり、功利主義は個々人のあいだにある差異と固有性を軽視し、そうすることでそれがもつ自然権を無視する。さらに、功利主義が異なる種類の効用の通約性を認めることは「効用の多元性」を無視することである（塩野谷 1984, 378）。

このように、塩野谷は権利論の観点から「自由・平等な道徳的人格」（塩野谷 1984, 422）がもつ自然権を擁護し、功利主義がそれを不当に軽視するとみなす（*ibid.*, 407）。塩野谷において、個人の自然権の擁護は正しいことであり、それは功利主義が考える社会善の最大化に優先されるべきである。塩野谷がこの考えを「正>善」という図式で示す。

塩野谷の「正>善」という構想をより詳細に明らかにする前に、塩野谷が用いるロールズの功利主義批判を概要しよう。ロールズによれば、功利主義は個々人の効用すなわち社会善のみを社会評価の基準にすることで、その最大化のためならば個人の権利が侵害されることも厭わない。さらに、功利主義は個々人の効用を集計可能であるとみなすことで「個々人のあいだの差異を真剣に受け止めない」（Rawls 1971, 27 / 訳 39）。

そのように功利主義を批判したうえで、ロールズは個々人の道徳的人格の尊重と個々人のあいだの多元性を重視する独自の正義論を構築する。ロールズが提示する正義の原理は正義の二原理と呼ばれる。第一の原理はすべての個人の基本的諸自由の保障である。第二の原理は機会の公平な均等及び、もっとも恵まれない人々の財が増える配分が望ましいとみなす、格差原理という基本財の再分配方法を示した原理である。ロールズによれば、正義の二原理は「無知のヴェール」と呼ばれる、当事者たちの社会的属性などが分からない状況の下である原初状態において選択され、各人の反省的均衡を通じて合意に至る（Rawls 1971, chap. 3）。ロールズが述べる善に対する正義の優先性とは、彼の主張する正義の実現が、功利主義が主張するような社会善の最大化に優先されることを意味する（*ibid.*, sec. 6）。言い換えれば、道徳的人格の尊重とそれに基づく個人の権利が社会善の実現よりも優先されることを意味する。

塩野谷はロールズの正義論の基本理念とは「道徳的人格に対する平等な配慮と尊重」であり、それが個々人の権利を基礎づけると考える（塩野谷 1984, 421-22）。この解釈のもとで、塩野谷はロールズによって提唱された善に対する正の優先性を支持する。

こうした塩野谷による功利主義批判は、ロールズの功利主義批判に賛同しつつも、それとは次の点で区別される。第1に、塩野谷の功利主義批判の核心部分は、功利主義が善のみによってすべての価値を説明可能であるとみなす理論構造を「善の全体論」と定義して明らかにしたことである。「正>善」とは、正義が善に優先するという意味のみではなく、「善の全体論」に反して、正義が善から独立した概念であることをも意味する。他方でロールズは功利主義の理論的分析を行わない。第2に、塩野谷は、功利主義は個人の場合においてすら、効用の多元性を無視すると批判する。つまり、それは個人の効用がもつ質的な差異を考慮に入れない。他方で塩野谷によれ

ば、ロールズは個人の善を質的に区別しない。そのためロールズは功利主義に対して、「個人の場合における正しい選択原理が誤って社会の場合に拡張されている」（塩野谷 1984, 405）と批判するのみである。第 3 に、功利主義は自己の同一性を軽視するが、ロールズもまた同様に、原初状態論において無知のヴェールを想定することで、自己の同一性を軽視する（*ibid.*, 450-51）。他方で塩野谷は社会的背景を有する自己の同一性とその能力の実現を重視する。こうして塩野谷（1984）は彼の卓越主義の立場を示唆するが、その具体的な構想を明らかにしない。

これらの議論から分かることは、初期において、塩野谷は個人に対してであれ社会に対してであれ、効用のみを情報的基礎とみなす功利主義を批判し、それに対して時間的に継続する社会的な自己の概念を重視し、その能力の発揮こそが望ましいと考えることである⁵⁾。特にロールズとの相違点である第 2 及び第 3 の点は、塩野谷の後期における卓越主義的な考えの土台となると考えられる。次に、後期における塩野谷の卓越主義を明らかにする。

（2）『経済と倫理』（塩野谷 2002a）における正と善

塩野谷の理論的發展を示すよりも前に、ここでアマルティア・セン（Amartya Sen, 1933-）によってなされたロールズ批判を概要することが有益である。なぜなら、塩野谷はそれを自らの卓越主義を示すための手掛かりとして用いるからである。『正義論』出版後の 1970-80 年代において、センはロールズ批判を展開する。センによれば、ロールズは正義の二原理によって基本財の配分に焦点を当てる。だがそうすることで、人間がその財を用いてどのような自由を実現するかを問題にしない。またロールズは、個々人が同じ財を用いてもたとえば障害者と健常者とでは達成可能な自由が異なるという点を考慮せず、そのために人間の多様性を軽視する（Sen 1997, 365-66 / 訳 249-50）。たとえば政府が自転車を個々人に 1 台ずつ配ったとしても、足の不自由な人はそれを使いこなすことができない（*cf.* Sen 1985, 6-7 / 訳 22）。このように財の平等な配分に焦点を当てることは結果的に実現可能性という観点からは不平等な配分となりうる。センはその代りに、人間が「在ることと為すこと」（being and doing）を機能とみなし、その集合である潜在能力を豊かにすることを福祉政策の指標とすべきであると考え（*ibid.*, 6-11 / 訳 21-29）。

このようなセンの立場は、塩野谷によって個人の能力の実現を目指す卓越主義の一類型と位置づけられる。『経済と倫理』（塩野谷 2002a）において、塩野谷はそれまでと同様に「『正』を最高の倫理として位置づける」（*ibid.*, 25）という立場を維持しつつ、センの潜在能力論などに賛同しながら自らの卓越主義を明確に示す。まず彼は初期に引き続き、ロールズの功利主義批判に賛同しつつ、功利主義を批判する。塩野谷によれば、正義とは人間の尊厳とそれに基づく個々人の自由や権利の擁護である。それを基礎づけるのは人格の尊厳を意味する「道徳的人格への平等な配慮と尊重」という理念であり、それこそがロールズの正義論のみならずリベラリズムの基本理

5) ただしこの時点では、権利の基礎づけはなされない。塩野谷による個人の権利の扱い方に関する批判として、井上（1986）を参照。

念である。しかし、功利主義は社会善の最大化を目標とすることでそれらを軽視する。塩野谷は「正>善」という立場を貫き、リベラリズムの基本理念は功利主義的な社会善の最大化に優先されるべきであるとする (ibid., 64-65)。

他方で『経済と倫理』においては、『価値理念の構造』における塩野谷とロールズの相違点に加えて、両者の相違点がより明確である。第1に、ロールズは上記の基本理念を個人の自尊と表現し、それをみとすために基本的諸自由の保障が必要であるとする。さらに、彼は自尊それ自体が基本財の1つであるとする (Rawls 1971, sec. 67)。他方で塩野谷によれば、ロールズの基本的諸自由及び基本財は自尊の前提条件でしかない。個人は自尊をもつためにはそれに加えて自己評価が高くなるようななかを達成しなければならない。社会はその実現のためにサポートしなければならない (塩野谷 2002a, 88)。第2に、前述した通り塩野谷はセンのロールズ批判に賛同し、ロールズは基本財の配分に焦点を当てることで個人の能力の実現を考慮しないと考える。そのうえで彼はセンの潜在能力論に賛同し、個々人の能力の発揮を求めるセンの潜在能力論は徳の倫理学、すなわち卓越主義の観点からとらえられなければならないと述べる (ibid., 129)。さらに『経済と倫理』では、『価値理念の構造』での両者の相違点として示した第2, 第3の点である、個人における善の質的差異の擁護と社会的で持続する自我の概念も示されている⁶⁾。

要するに、塩野谷とロールズのあいだの相違点は、自己の人格の同一性や善の質、能力の向上について重視するという塩野谷の卓越主義的な考え方や、善の多元的価値を擁護し個人の価値観への政治的介入を嫌うロールズの非卓越主義的なリベラリズムの考え方のあいだにある。

2. 卓越主義——徳と善——

前述したように、塩野谷はロールズとは異なり、個人の卓越性すなわち徳の実現を重視する。さらに彼は、それが功利主義的な共通善の追求よりも優先されると考える。すなわち、ここには塩野谷の倫理体系における「徳>善」という関係が示されている。

塩野谷は自らの卓越主義の特徴を次の7点にまとめる。第1に、卓越主義は「良き生」に関する客観理論であり、「良き生」とは人間本性の発展である (塩野谷 2002a, 133)。第2に、卓越主義は人間の能力の実現を重視する。彼の言葉を借りれば、卓越とは「人間の能力の発展およびその結果の達成の卓越性に依存する」(ibid., 134)。第3に、人間の能力ないし卓越の成果は「社会的『実践』における客観的な成果の生産能力」に依存する。つまり、卓越の社会的評価は、社会的に必要とされる機能を果たす適性によって定まる。第4に、卓越の評価基準はその社会の文化に依存する (ibid., 135)。第5に、「個人の卓越性の最も顕著な側面は、社会的活動において秀でた能力を発揮し、シュンペーターの言う『イノベーション』(革新)を生み出すことである」(ibid.,

6) 自我の概念に関する塩野谷によるロールズ批判は、共同体主義の立場からロールズを批判するマイケル・サンデルの立場に近い (cf. Sandel 1984)。

135)⁷⁾. すなわち、新しい価値の創造こそがもっとも卓越した行為である。第6に、我々の活動はすべて社会的な機能を有する (ibid., 136)。第7に、「『卓越した社会』は、結果的に何が優れたものであるかについて基準があり、それが高度に充たされている社会である」(ibid., 136)。すなわち、卓越性には客観的な基準がある。要するに、塩野谷の卓越主義の特徴をまとめると、第1にそれは人間の能力の実現は客観的な基準に基づいて社会的に評価され、第2にそれは人間本性すなわち人間らしいことであり、第3にそれは社会实践の中で達成されるべきだということである。

塩野谷の卓越主義がもつこれらの特徴を理解するために、潜在能力に関するセンとマーサ・ヌスバウム (Martha Craven Nussbaum, 1947-) の論争を示すことは有益であるだろう。センは、一方で基礎的な潜在能力がみだされることの必要性を説きつつも、リベラルな観点から、個人がどのように自らの能力を実現するかを自己の選択に委ねており、塩野谷が考えるような社会評価に基づいた卓越性を推奨するわけではない。またそれは必ずしも社会实践への貢献を意味しない。他方で潜在能力論をセンとともに発展させたヌスバウムは、個々人がみだすべき潜在能力を客観的にリスト化し、その達成が人間らしさを表すと述べる (Nussbaum 2000, 78-80 / 訳 92-95)⁸⁾。つまり、第1と第2の点で彼女は塩野谷と親和的である。ただし塩野谷は、ヌスバウムは社会实践への貢献を必ずしも要求しないという点で自らと異なると考える (塩野谷 2002a, 132)⁹⁾。塩野谷によれば、人間は社会的存在であり、その活動はすべて社会的である¹⁰⁾。

塩野谷のこのような立場はそれぞれ次の3点の疑問を生み出すだろう。第1に、センとヌスバウムの論争に示されるように、個人の卓越性は自己評価に基づくのか社会評価に基づくのかという問題があり、後者の場合には個々人の価値観あるいは人生観の多様性が損なわれないかという疑問である。第2に、個人の能力の実現はなぜ人間本性に基づくかといえるのかという疑問である。第3に、社会实践をするか否かに関する個人の選択の自由をどう保障するのかという疑問である。

塩野谷はこれらの疑問に直接的に答えていないものの、第1と第2の疑問に関しては、次のように考えると解釈しうる。第1の疑問については、個人の能力の実現は自己評価とともに社会評価を高めるために、双方は両立可能である。人間がもつ創造性などの能力を最大限に発揮することは、それ自体で自己評価を高める。なぜなら、自尊は自らの能力を最大限に発揮することによって得られるからである。また、人間は社会的動物であるがゆえに社会貢献をすべきであり、社会

7) 第4と第5の点から、「卓越性を追求することは、…『文化価値』を追求することである」(塩野谷 2002a, 135-36) という意見が導き出される。「文化価値」は左右田喜一郎の用語であり、理性的で普遍的な価値を実現しようとする活動のもつ価値という意味である (塩野谷 2002a, 391; 塩野谷 1987; 左右田 1922)。

8) センとヌスバウムのリスト化論争に関しては、玉手 (2017) を参照。

9) 塩野谷自身は自らとヌスバウムの相違点をこのように指摘するが、後述するように塩野谷はヌスバウムの共同体主義の側面を見落としていると考えられる。

10) 塩野谷によれば、アリストテレス的伝統に立つ徳の倫理学において人間本性は社会实践において現れ、そのために人は社会的存在になる (塩野谷 2002a, 126)。

評価という基準を設けることでそれがもつ社会貢献の度合いを測ることができる。ただし、塩野谷が「卓越の評価基準はその社会の文化に依存する」と述べることに注意が必要である。後述するように、塩野谷が定義する共通善とは個々人の能力を高めることを意味するがゆえに、個々人の能力の実現はたとえ自己評価に基づいたそれであっても、それ自体で社会貢献になり、社会評価を得られる。

この点は、塩野谷が定義した意味における「善と徳」の関係性を明らかにするために重要であると考えられる。そのことを明らかにするために、ここで、塩野谷の後期の著作である『ロマン主義の経済思想』（塩野谷 2012）をも参考にしながら、塩野谷の共通善の定義を明らかにしよう。

『ロマン主義の経済思想』において、塩野谷は 19-20 世紀において社会福祉論を展開するケンブリッジ学派を批判し、同時期のオックスフォード学派を支持する。ケンブリッジ学派とは、新古典派経済学にはじまり、ピグー（Arthur Cecil Pigou, 1877-1959）によって創設された旧厚生経済学、それからの克服を試みる新厚生経済学までを生み出した学派である。他方でオックスフォード学派は、厚生経済学の効用主義や集計主義を批判し、卓越主義を奨励する学派である。塩野谷によれば、ケンブリッジ学派における新古典派経済学と旧厚生経済学は、効用で表された目的関数の極大を求めるという点で共通する。だが、一方で新古典派経済学は効用の最大化を実際の個人行動を予測するための仮説として用いるが、他方で旧厚生経済学はそれを規範的に望ましいとみなす。しかし、そのような効用主義的な考え方は、記述的経済学と規範的経済学を混同した「自然主義的誤謬」的な見方であり、規範経済学は独立して考察されなければならない（塩野谷 2002a, 55-60）¹¹⁾。

ただし塩野谷は、共通善の追求という厚生経済学の目的自体に批判的であるわけではない。彼はオックスフォード学派の思想を援用しつつ、功利主義とは異なる定義による共通善の概念を提示し、それを追求することが望ましいと考える。塩野谷によれば、個々人の自己実現（卓越主義）とは、それ自体が共通善あるいは共同の善である。まず、塩野谷はジョン・ラスキン（John Ruskin, 1819-1900）から、富とは即ち生であり、経済の目的は自己実現の可能な個人をできるだけ多く生み出すことだという思想を援用する（Ruskin [1867] 1903-12, 55-56; 塩野谷 2012, 159）。ここで述べられる「生」とは、「肉体と精神を含む『全幅的人間本性』（entire human nature）の幸福と力をいう。ラスキンにおいては、『生』は、『肉体・感性・知性』の完成・卓越を求めるという規範的な目的概念である」（塩野谷 2012, 165）。つまり、個人はそう定義された生を営むべきであり、経済はそれを支える手段である¹²⁾。

さらに、そうした生の追求は個別になされるのみではなく、社会的になされう。そのことを示すために、次に、塩野谷はトーマス・ヒル・グリーン（Thomas Hill Green, 1836-1882）から共

11) 新厚生経済学は効用主義ではなくパレート原理に依拠するものの、その原理が社会状態の最終評価を下せないという問題点がある（塩野谷 2002a, 57）。

12) 塩野谷も寄稿し、この観点から 20 世紀初頭のイギリス厚生経済学の再解釈を試みる研究として、Backhouse and Nishizawa (2010) を参照。

通善ないし共同の善という考え方を援用する。塩野谷によれば、個々人の自己実現は道徳的進歩の条件としての共通の価値基準であり、そのような意味で共通善である（塩野谷 2012, 217）。

「自己実現」ないし卓越は、個々人の人間能力の発揮という意味で、「個人的善」（personal good）の観念を意味するが、同時に各人が他人をも同じ人格として認め、他人の関心事を自分の関心事のように配慮するあり方を特徴づけるものとして、「共通善」の概念が提起される。…「共通善」は、誰もが共通に欲求する特定の対象（財・サービス）を指すのではなく、誰もが共通に「自己実現」をしようとする性向を指す。

（塩野谷 2012, 219-20）

つまり、塩野谷の定義する意味において、個人の徳の追求と共通善の追求は両立可能である。そのうえで、彼はすべての個人が自己の能力を自己評価によって実現することが共通善として望ましいという立場を、エリート主義的卓越主義とは区別した「リベラルな卓越主義」と呼ぶ（塩野谷 2002a, 137; 塩野谷 2012, 230）。このような塩野谷による共通善の説明には、ヌスバウムとは区別された塩野谷の独自性が示されていると考えられる¹³⁾。

さらに、第2の疑問に関して、塩野谷とグリーンのあいだには次のような差異がある。一方でグリーンは自己実現を達成することを共通の価値観としつつも、それを人間本性であるとは捉えない。他方で塩野谷は自己の能力の実現はカントの道徳的人格論からすれば「自己の完全性」の実現であり、そうすることは義務であると述べる（塩野谷 2002a, 138-42）。つまり彼はそこに人間らしさを見出す。ヌスバウムも同様に自己実現を人間本性とみなすが、この点に関する彼女と塩野谷の差異は以下の2点である。第1に、ヌスバウムは自己実現の達成に関して人間らしさという閾値を設けるが、塩野谷は自己実現そのものが人間本性であると説く。第2に、評価基準に関して、ヌスバウムは社会的文脈を超えた普遍的な基準を設けるが、塩野谷はそれを社会的評価に依存するとみなす。

要するに、塩野谷の定義する意味において、善と徳は一致する。彼は経済学者の立場から、厚生経済学の伝統である共通善の追求という立場を自らの立場と両立しようと試みる。塩野谷がこのように厚生経済学の伝統を継承することを試みる背景には、新古典派経済学とそれに支えられた市場主義に対抗しうる、福祉経済の理論とそれを支える社会哲学を追求するという問題関心があると考えられる。そのため、彼はロールズやセンの議論に代表される正義論を厚生経済学と総合的に捉えようと試みた。

3. 正 と 徳

ただし、卓越性の追求すなわち共通善の追求は、正しい制度のもとでその制約を受けながら

13) ただしヌスバウムは塩野谷と同様に、アリストテレス主義の立場から、他者の善もまた個人の善の一部であり、それゆえに個々人の善は共同体の内部で協力して追求されなければならないと説く（cf. 寺尾 2018）。ヌスバウムと、塩野谷及びグリーンとの差異は、後者がそれを共通の価値観とみなす点である。

されなければならない。塩野谷は人間の尊厳によって基礎づけられた卓越主義を主張しつつも、リベラリズムの基本理念である「道徳的人格への平等な配慮と尊重」という理念に賛同し、正義が自らの卓越主義よりも優先されるべきとみなす。この意味において、塩野谷は「正>徳」という優先順位を提示する。ただし、塩野谷が述べる「正>徳」とは、ロールズによる個人の権利の擁護という正の定義に従った意味において成り立つ。つまり、塩野谷は個人のもつ自然権を制度的に保障したうえで、その社会において善を評価する際に卓越主義を採用するべきであるとし、その点で自らの理論はロールズの正義論と両立すると述べる（塩野谷 2002a, 128）。

他方で、塩野谷自身の構想による正しい制度と徳の関係はより複雑である。彼は正しい制度の制約の下で個人が卓越性を発揮すべきと考えるものの、その正義を基礎づける尊厳の理念は卓越主義によって支えられるとみなす。塩野谷によれば、

ロールズの理論構成が示すように、「制度」を主導する「正義」の観念は、…それ[卓越]を基礎としている。…「卓越」は個人の状態に関する絶対的観念である。…貧困は人間の尊厳の欠如であり、卓越の逆である。「基礎的ニーズ」に基づく「卓越」の理念は、「正義」の理念に先行する社会保障の第一次的根拠であると言わなければならない。…「卓越」の考え方は、法律学において生存権あるいはその基礎にある人間の尊厳という観念によって社会保障を基礎づける考え方と対象をほぼ等しくしている。

（塩野谷 2002a, 253, []は引用者）

つまり、塩野谷の定義においては尊厳の理念と卓越はほぼ同等に扱われており、その点で、正と徳のあいだに明確な優先順位はないと考えられる。

4. 正と徳と善

ここまで述べてきたように、塩野谷は初期における「正>善」という優先順位に基づく功利主義批判を後期まで採用しつつ、後期においては、卓越主義的な観点から「正>徳>善」というヒエラルヒーを提示する。これは個々人の自然権の保障が功利主義的な社会善の追求に優先し（正>善）、卓越主義的な徳が功利主義的な社会善に優先し（徳>善）、個々人の権利を保障する正しい制度の制約が各人の卓越の追求に優先するべきである（正>徳）ということの意味する。

他方で、塩野谷が解釈し定義する正・徳・善のあいだの関係性は、正が最高の倫理であり、徳は正の前提になり、善は徳と一致すると解釈できる。自らの卓越主義がなぜ正当化されるのかという問題に対しては、塩野谷は前述したカントを用いた道徳的完成の議論に見られるように、自己実現と尊厳や自尊のあいだの関連性を指摘し、それによって卓越主義を基礎づけると答える。

このような塩野谷の立場の独自性は、以下の2点である。第1に、塩野谷の卓越主義は、人間の尊厳に基づく潜在能力の実現を求めるという点においてヌスバウムのそれにもっとも親和的である。他方でヌスバウムとの差異は、塩野谷が自己実現それ自体を人間本性であると説き、さらに厚生経済学の共通善の追求という立場と卓越主義の両立を図る点である。第2に、塩野谷は独

自の経済倫理学を提唱し、次節で述べるように、その中で自らの卓越主義的な理念の実現にとって必要な制度がいかなる改革を経て民主的に採択されるのかを分析した点である。

IV 卓越主義の制度

塩野谷はこのような倫理体系に基づいた、倫理学と経済学の結合を目指す経済倫理学を提示する。塩野谷によれば、倫理と経済のあいだには、倫理は人間の良き生とは何かを問い、経済はそのための資源を管理するという関係が成り立つ（塩野谷 2009b, 332）。そのうえで彼は、正を対象とする経済学を経済社会学、徳を対象とする経済学を経済動学、善を対象とする経済学を経済静学と呼ぶ。経済社会学は公正な財の分配を追求し、経済動学はシュンペーターの経済学を援用して卓越主義的な経済発展を分析する。さらに、経済静学は功利主義を土台とした新古典派経済学を用いて市場の均衡状態を分析する（塩野谷 2009a, 328-33）¹⁴⁾。本節では、塩野谷の経済倫理学を主に制度設計の観点から明らかにし、彼の制度改革の方法を示す。

1. 社会保障制度——社会経済学と経済静学——

「正」を対象とする社会経済学と功利主義的な「善」を対象とする経済静学との関係について、塩野谷は「正>善」という関係に基づいて分析を進める。

経済静学に関しては、塩野谷はそれを新古典派経済学の領域として述べており、それに付加した理論を示すわけではない。彼は新古典派経済学を支える功利主義を批判した理論を展開するものの、新古典派経済学を否定するわけではなく、その限界を示すことを試みる。塩野谷によれば、新古典派経済学は平均的な合理的個人の行動に基づいて経済の静的な状態を分析する。さらにそれは功利主義的な観点からパレート最適状態を社会善の最大化の状態として望ましいとみなし、厚生経済学の基本定理により、競争市場においては均衡点がパレート最適になると主張する。

しかし、塩野谷によれば、厚生経済学の基本定理は道徳的前提がなければ成り立たない。市場均衡によるパレート最適性は外部性がない状況で達成される。その状況はすべての財に価格をつけられることを前提とするが、実際の社会では有益であるとしても価格がつかない財は数多く存在する。そのような不完全性が前提とされる場合、法律だけでなく個々人の道徳や慣習によって外部性が取り除かれる必要がある（塩野谷 2002a, 152-53）。つまり、市場均衡の結果の望ましさは法律や道徳や慣習という非市場的な要素に依存する。また実際にはすべての外部性を取り除くことはできず、市場の失敗は起こりうる。そのため、市場に対する国家介入が必要である（cf. 塩野谷 1973b）。

さらに言えば、国家による政策の実施はパレート最適状態を生み出す補助としてなされるだけでなく、正義に適う必要がある。このような正しい政策とは何かを考えるのが経済社会学であ

14) ここでの「善」は功利主義的に定義された「善」を意味する。

る。塩野谷は経済社会学において、個々人の人格の平等な配慮と尊重という基本理念に基づいた、個々人の卓越性ないしは能力の実現のための対策として社会保障制度を提唱する。彼は正義の二原理をみたま社会保障制度を提唱するロールズに賛同しつつ、それとは以下の2点で異なると述べる。

第1に、基本財の配分を求めるロールズに対して、塩野谷は前述したように、卓越主義によって要求されるのは個人の能力を高める潜在能力の実現であると考えている。第2に、塩野谷によれば、社会保障はロールズが述べるように各人のニーズの充足のためではあるが、個人が自力で基礎的ニーズを満たせない際のリスク回避手段という意味のみをもつのではなく、自己実現の機会の提供という積極的な意味をもつ。政府が個々人のニーズを平等に充たすべきであるという考えの背景には各人の尊厳という理念がある。その理念は前述したように、塩野谷が考える卓越主義的な人間観によってこそ支えられなければならない(塩野谷 2002a, 250)。こうして「卓越主義が社会保障の観念の中に導入されなければならない」(ibid., 251)ことになる。その観点からすれば、社会保障は各個人の自己実現の機会を平等に提供しなければならない。つまり、それは人々が良き生を営むために必要な社会的要素を提供するべきである。塩野谷は次のように述べる。

卓越主義によれば、「良き生」は人間本性を構成するさまざまな特性を發展させ、社会的実践において優れた成果を生むことであり、このことによって個人的自律、人間的卓越、人間的繁栄、自己実現が可能となる。…社会保障は、…ニーズの充足による人間の卓越の追求を支えるものである。これを社会保障の消極的自由(「リスクへの対応」)および積極的目的(「自己実現の機会」)と呼ぼう。(塩野谷 2002a, 251)

このように、塩野谷は卓越主義の観点から社会保障制度を支持する。その制度はリスク回避手段のみではなく、自己実現の達成のための機会提供の手段でもある¹⁵⁾。

2. 技術革新——経済静学と経済動学——

次に、経済静学と経済動学の関係に関しては、「徳>善」という関係よりも複雑な関係が割り当てられているように解釈できる。それはむしろ経済の静的状態と動的状態の関係、あるいは適応と革新という関係である。塩野谷によれば、新古典派経済学は「一定の選好・技術・資源量の下での静態均衡の決定」(塩野谷 2009b, 332)に焦点を当て、動学は静学が前提とする技術や資源量などの変化の帰結を問題とする。たしかに新古典派経済学にも経済成長論はあるものの、それは個人の合理性を動機とする。他方で、後述する塩野谷の動学では、それとは異なる原動力が示される。

塩野谷は中期及び後期において動学的な経済発展の議論を展開する。ここで塩野谷の経済動学

15) ここには塩野谷の定義する意味における「正と徳」の関係である。徳が正の前提となるという基本理念が根底にあるように解釈できる。

を示すために、彼のシュンペーター解釈を端的に述べるとしよう。シュンペーターによれば、資本主義の発展には競争のもとでの個々人のイノベーションによる技術革新が必要であり、個々人の卓越性の発揮がその原動力である。イノベーションとは、常識的な価値観や共通善にとらわれない新しい創造性を意味する。それは非凡性を意味するがゆえに、少数の者が有するという意味において希少である。シュンペーターはそれを創造的破壊と呼び、競争原理によって勝ち抜いた少数の非凡な卓越性をもつ個人が旧来の価値観を破壊し、新しい価値観を創造することで資本主義は発展すると述べる。つまり、シュンペーターの動学は主流派経済学である新古典派経済学の動学とは異なり、合理性ではなく感情や意志をも含めた創造性を経済発展の原動力とみなす（塩野谷 2009b, 332）。塩野谷は自らの経済動学をこのようなシュンペーター解釈をつうじて明らかにする。塩野谷によれば、

イノベーションは非凡な卓越性である。卓越性を求める指導者のエートスが、シュンペーターのいう企業者精神である。彼はそれを三部の動機に分析している。第一は、自分の帝国と王朝を建設しようという夢想と意思、第二は、闘争意欲、成功意欲、そして勝利者意思、第三は、創造の喜びである。（塩野谷 2002a, 178-79）

要するに、塩野谷はエリート主義的な卓越主義を中心として彼の経済動学を示し、合理性という一元的な動機のみを扱う新古典派経済学は経済の静態のみを対象としようと述べる。塩野谷の解釈するシュンペーターによれば、一方で卓越したエリートが技術革新を行い経済発展を促し、他方で平均的な合理的個人はそれに適応して新しい均衡点を作り出す。こうして「革新と適応」という関係性のもとで経済は発展する（塩野谷 2012, 269-70）。

3. 社会改革の方法——経済社会学と経済動学——

最後に、経済社会学と経済動学の関係を示そう。双方の関係も「正>徳」という関係よりも複雑であるように解釈できる。経済社会学は経済動学を応用し、制度改革の方法を探る理論であるとみなされる。塩野谷は経済社会学において、倫理体系を具体化する制度の構想のみではなく、その歴史的变化の問題をも扱う（塩野谷 1995, 58）。その際、彼は経済社会学において社会保障制度が採択される方法を、動的経済学を応用することで明らかにする。

倫理体系で塩野谷が定義した、徳と同等に扱われる共通善は、時代を通じて不変的な、制度設計の土台となる価値観である。他方で、塩野谷の考える共通善はそれだけで成り立つわけではない。彼はシュンペーターの思想に大きく影響を受けながら、共通善が時代を通じて変化する動的な過程を制度改革の過程として考察する。彼によれば制度は「『理論化された歴史』の方法であり、歴史と理論との統合の道具」（塩野谷 2012, 302）である。

塩野谷によれば、実際の社会における共通善は彼が望むような卓越主義的なそれではないかもしれない。しかし共通善はわれわれが変化を志しさえすれば、歴史的に変化する（塩野谷 2012, 316-17）。そうであるとすれば、われわれはいかにして変化を志すべきであるのかが問題

となる。この問いに対して、塩野谷は経済社会学において、共通善の歴史的变化は卓越主義的な動機をもつ個人による制度改革をつうじてなされると答える (ibid., 301-02)。その方法を彼はシュンペーターのイノベーション論を応用することで明らかにする。

シュンペーターによれば、イノベーション論は資本主義に限定されない。彼は資本主義と民主主義の区別を指摘しつつも、この議論を民主主義における制度改革論にも採用する。塩野谷によれば、シュンペーターの民主主義論は卓越的な政治的エリートとそれに従う大衆という構図をもつ。それは「国民の一般意志や公共の利益の実現といった理念論を排除」(塩野谷 2002a, 222) し、「[民主主義と市場機構という] 両制度が、競争を通じて革新的な指導者としての企業家や政治家が出現する場としてとらえられている。…[動態的な革新は]新しい活動の軌道を創設するエリートによるリーダーシップと卓越性の行為である」(ibid., 222, [] は引用者)。

塩野谷も後期において自らの民主主義論にシュンペーターの民主主義論を応用する (塩野谷 2002a, 213-14, 225)。塩野谷はそれをより一般化させて、民主主義は国民の意思を実現する場ではなく、人民がエリートの革新的な指導者を投票で選ぶという意味での人民投票型指導者民主主義が望ましいとみなす。この民主主義は言い換えれば「革新的民主主義」(ibid., 228) であり、公共的利益の追求という政治目的を理解しつつも、政治的決定は市場競争と同じリーダーによるイノベーションの場であるとみなされる。

塩野谷によれば、このような人民投票型指導者民主主義が成功するためには、政治家は高い徳をもたなければならない。すなわち「政治家がカリスマ的資質に加えて、社会の局所的利害から倫理的に超然たることが必要であると同時に、十分な専門的知識・情報をもつことが必要である」(塩野谷 2002a, 227)。さらに、市民は公共的空間において政治家の提案に関して討議をしなければならない。彼は政治家のリーダーシップが扇動を招くことを理解したうえで、それを防ぐために、市民が公共的理性と適切な知識、特に専門知識をもって公共空間で指導者の提示する政策案を吟味、討論することが必要であると述べる (ibid., 238-42, 278-79)¹⁶⁾。つまり、討議的民主主義が要請される (ibid., 229, 237)。要するに、塩野谷の考える理想的な民主的決定においては、一方で、政治とは一部のエリートによる権力闘争であり、彼らは倫理に従いながら自らの卓越性を競い合う。他方で、市民は公共的理性を働かせて、エリートのあいだの権力闘争をジャッジする。その過程をつうじて制度は民主的に改革されていくとみなされる。

4. ま と め

これまでの議論をまとめよう。塩野谷は倫理体系として示された自らの卓越主義の構想を中心として彼の経済倫理学を構築する。倫理体系としては、塩野谷の定義によれば、正は最高の倫理であり、善と徳は一致し、徳は正の前提となるという関係が示された。さらにそれらの理念を具

16) 公共的理性とはロールズの説く公共的理性を指し、市民のあいだの互惠性と相互承認の理念に基づく (塩野谷 2002, 233-40)。

現代化する経済学が示された。そこでは、経済社会学によって「リベラルな卓越主義」を支える正しい制度の在り方が示され、経済動学によってエリート主義的な卓越主義に基づく経済発展の方法が示される。他方で経済静学はある時間的な断片を切り取った分析であり、またその倫理的前提や限界を指摘される。さらに経済社会学は経済動学を応用して、正しい制度への改革の在り方を示す。その制度改革の方法とは、経済動学におけるエリート主義的な卓越主義を民主主義に応用し、卓越したエリートのリーダーとその提案の是非を判断する市民たちという人民投票型指導者民主主義によって成り立つ。

塩野谷は前述した倫理体系とともにこれらの3つの経済学の構想を組み合わせる彼の経済倫理学を構築する。それは新古典派経済学の代替案として、それを自らの構想の一部として取り入れつつも、その問題点や限界を指摘し、より広い考察を可能にする学として示された。

V お わ り に

本稿は、塩野谷祐一の経済倫理学の構想とその独自性を示すことを目的とした。結論として、塩野谷の経済倫理学の独自性は、彼が独自の卓越主義の構想を示すとともに、またそれを実現する制度設計及び制度改革の方法を示すことをつうじて、異なる研究分野を総合した理論として構築した点であることが明らかにされた。

最後に、塩野谷の経済倫理学に対して若干の疑問点を述べる。それは、塩野谷が経済社会学で示したような制度改革によって、塩野谷が理想とする「リベラルな卓越主義」によって基礎づけられた福祉国家が生まれうるだろうかという疑問である。言い換えれば、自らの卓越や非凡を求めるエリートによる提案が市民たちにどのように受け入れられるのか、またそのような目的をもつリーダーがいかにして一定の平等化を必要とする福祉政策を提案しうるのか、という疑問である。塩野谷は、制度改革において革新的エリートと大衆の二分化を図り、エリートの改革によって福祉国家が実現すると考える。だが福祉国家の実現のためには、ある程度の競争の規制と平等化のための政策が必要であり、このような政策はエリートによる卓越の追求の結果としては示されないのではないだろうか。また、塩野谷の市民社会が成立するために必要とされる徳は何かという問題もある¹⁷⁾。

ただし、このような疑問は別稿に譲ることとする。いずれにせよ、塩野谷の理論は現代においてもなお様々な問題を投げかけ続けている¹⁸⁾。

(齊藤 尚：東北学院大学)

17) 塩野谷における市民社会論の不在を説く先行研究として、山脇(2017)を参照。

18) たとえば自己実現のための社会保障という考え方は、現代の日本において、自立支援法などより困窮者の自立を促す制度が整えられつつあるという潮流に合うと考えられる。潜在能力論の観点から日本の社会保障の在り方について論じた文献として、セン・後藤(2008)を参照。

参 考 文 献

- Backhouse, R. E. and T. Nishizawa, eds. 2010. *No Wealth but Life: Welfare Economics and the Welfare State in Britain, 1880-1945*. New York: Cambridge University Press.
- Nussbaum, Martha. 2000. *Women and Human Development: The Capabilities Approach*. Cambridge, MA: Cambridge University Press. 池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳『女性と人間開発—潜在能力アプローチ』岩波書店, 2005.
- Parfit, Derek. 1984. *Reasons and Persons*. Oxford: Clarendon Press. 森村進訳『理由と人格—非人格性の倫理へ』勁草書房, 1998.
- Rawls, John. 1971. *A Theory of Justice*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 川本隆史・福岡聡・神島裕子訳『正義論』紀伊国屋書店, 2010.
- Ruskin, John. [1867] 1903-12. *Time and Tide*. In *The Works of John Ruskin*, vol. 17, ed. by E. T. Cook and A. Wedderburn. London: George Allen.
- Sandel, Michael J. 1984. The Procedural Republic and the Unencumbered Self. *Political Theory* 2 (1): 81-96.
- Schumpeter, Joseph A. 1950. *Capitalism, Socialism and Democracy*. New York: Harper. 中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社, 1995.
- Sen, Amartya K. 1985. *Commodities and Capabilities*. New York: Elsevier Science Publishing. 鈴木興太郎訳『福祉の経済学—財と潜在能力』岩波書店, 1988.
- . 1992. *Inequality Reexamined*. Oxford: Oxford University Press. 池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳『不平等の再検討—潜在能力と自由』岩波書店, 1999.
- . 1997. Equality of What? In *Choice, Welfare and Measurement*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 大庭健・川本隆史訳『何の平等か?』『合理的な愚か者—経済学=倫理的探求』勁草書房, 1989.
- Shionoya, Y. 1997. *Schumpeter and the Idea of Social Science: A Metatheoretical Study*. New York: Cambridge University Press.
- . 2005. *Economy and Morality: The Philosophy of the Welfare State*. Cheltenham, UK and Northampton, MA: Edward Elgar.
- Sidgwick, Henry. 1907. *The Methods of Ethics*. London: Macmillan.
- 有江大介. 2009. 「(書評) 塩野谷祐一『経済哲学原理—解釈学的接近』」『経済学史研究』52 (2): 149-50.
- 井上達夫. 1986. 『共生の作法—会話としての正義』創文社.
- 川本隆史. 2002. 「(書評) 塩野谷祐一『経済と倫理—福祉国家の哲学』」『季刊 社会保障研究』38 (4): 331-34.
- 小林正弥. 2002. 「(書評) 塩野谷祐一著『経済と倫理—福祉国家の哲学』」『季刊 家計経済研究』56:64-69.
- 塩野谷祐一. 1973a, 増補版 1977. 『現代の物価—インフレーションへの体制論的接近』日本経済新聞社.
- . 1973b. 『福祉経済の理論』日本経済新聞社.
- . 1984. 『価値理念の構造—効用対権利』東洋経済新報社.
- . 1987. 「経済哲学の現在—左右田・杉村とそれ以降」『一橋論叢』98 (1): 1-19.
- . 1995. 『シュンペーターの思考—総合的社会科学の構想』東洋経済新報社.
- . 1998. 『シュンペーターの経済観—レトリックの経済学』岩波書店.
- . 2002a. 『経済と倫理—福祉国家の哲学』東京大学出版会.
- . 2002b. 「小林正弥氏の書評に答える」『季刊 家計経済研究』56:70-71.
- . 2009a. 『経済哲学原理—解釈学的接近』東京大学出版会.
- . 2009b. 『エッセー 正・徳・善—経済を「投企」する』ミネルヴァ書房.
- . 2012. 『ロマン主義の経済思想—芸術・倫理・歴史』東京大学出版会.
- セン, A. K.・後藤玲子. 2008. 『福祉と正義』東京大学出版会.

- 左右田喜一郎. 1922.『文化価値と極限概念 左右田喜一郎論文集 (第2巻)』岩波書店.
- 玉手慎太郎. 2017.「民主主義と自由への権利」田上孝一編著『権利の哲学入門』社会評論社.
- 寺尾範野. 2018.「リベラリズムは障害者を包摂しうるか?—ケイバビリティと共通善の観点からの一考察」
現代規範理論研究会報告原稿.
- 森村 進. 2002.「(書評) 塩野谷祐一『経済と倫理 福祉国家の哲学』」『一橋法学』1 (3): 975-87.
- 山脇直司. 2010.「(書評) 塩野谷祐一著『経済哲学原理—解釈学的接近』」『季刊 家計経済研究』86, 72-77.
- . 2017.「市民社会, 政府, ガバナンス—公共哲学的考察」『経済社会学会年報』39:5-13.

Yuichi Shionoya's Theory of Economic Ethics: Focusing on his Conception of Perfectionism

Nao Saito

Abstract:

This article aims to demonstrate Yuichi Shionoya's theory of economic ethics by classifying his study into early, middle, and later stages and focusing on his conception of perfectionism. His theory is composed of ethics and economics. In early and later stages, Shionoya proposes his notion of ethics as one category of liberal perfectionism by demonstrating the relationship between the concepts of justice, goodness, and virtue. Part of its originality is that it is defined as being compatible with the pursuit of common good, which is the main purpose of welfare economics. Moreover, he proposes three kinds of economics: economic sociology, economic statics, and economic dynamics in the middle and later stages. He argues that a society in which liberal perfectionism prevails can be realized by the elitist method that he demonstrates in economic sociology. Thus, Shionoya attempts to construct his economic ethics as "universal social science" by integrating the ideas of political philosophy and welfare economics and showing consistency in his entire study. This article questions the consistency of Shionoya's theory of economic ethics.

The rest of this article is organized as follows. First, we classify Shionoya's study and show that his main purpose is to construct an alternative theory by criticizing neoclassical economics. Second, we clarify his view of perfectionism by showing his ethical system. We then outline his theory of economic ethics by analyzing his economics and clarifying his method of institutional reform. Finally, we express doubt as to whether reform can lead to his concept of an ideal society.

JEL classification numbers: B31, O31.